

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	福島県	番号	07
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	生徒数
	私立郡山ザベリオ学園中学校	182

○ 実践研究の内容

1. 協力校における取組

(1) 本校教員の研究や授業、行事等の取り組みへの意識改善

- ・ワークショップ型で行う研究全体会
- ・学校ルーブリックの作成と活用
- ・外部テスト、全国学力・学習状況調査の分析
- ・授業研究と事後検討会の在り方
- ・校外の教員研修への積極的な参加
- ・生徒の実態把握アンケート

(2) 生徒の学力差、学習動機づけに関する取り組み

- ・生徒による学び合いのルール作成
- ・ICTを活用した主体的・対話的な授業の実践
- ・少人数クラスの導入
- ・学び合いによる学習

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 本校教員の研究や授業、行事等の取り組みへの意識改善に関する成果

- ・教員へのアンケートより、ルーブリックの活用方法には課題があるが、行事や授業で活用することで目標を明確化することができた。
- ・1人年3回の授業研究を通して、全教員が授業改善の意識をもつことで、生徒の意識にも変容がみられた。

(2) 生徒の学力差、学習動機づけに関する取り組みに関する成果

① 学び合いによる学習との関係

- ・教員へのアンケートより、「課題の設定」や「タイミングの良い発問やヒント」「教室の雰囲気」など教員の授業力の向上が重要であることが分かった。

- ・学び合いのルールを生徒が主体的に作成したものを、授業前の教員によるルール確認と合わせることで意識して活動する様子が見られた。
- ・生徒への学び合いのルールに関するアンケートより、Step 2以上の生徒が全体の約8割を占めた。
- ・生徒への学習動機づけに関するアンケートより、本校生徒は比較的、同一化的調整の生徒が多いことが分かった。

②少人数クラスとの関係

- ・教員へのアンケートより、コース選択制や10人以下での授業において成果が見られた。
- ・クラスを半分に分けることで、生徒同士や生徒と教員とのコミュニケーションが増えた。

③外部テスト、全国学力・学習状況調査の分析

- ・外部テストの点数分布の推移を分析することで、特に少人数クラス制を取り入れている教科でグラフが右に移動していることが分かった。
- ・全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査において、意欲と学力には関係性があるという示唆を得た。

2. 実践研究全体の成果

アンケート結果や授業研究を通して、教員一人ひとりが教育の動向に対してアンテナを高くし、社会の変化を先取りした教育を提供していくためには、教科の壁を越えて授業実践を提供したり、他校の授業を参観したり、全教員が参加しての外部講師による研修などを今後も継続して行っていくことが重要だと考える。本研究では、全教員が関わって学校ルブリックを作成したことで、生徒達の未来を見据えた本校として育てる資質・能力を明確にすることができた。そのため、行事や授業では目指す生徒像を意識して取り組むことが可能となった。

本校で取り組んでいる学び合いでは、グループでの対話だけでなく、生徒一人ひとりが自分の考えをもつ時間を確保し、友達との対話の中でその考えを練り上げていく過程や経験が「コミュニケーションを通して、自分の思いや考えを豊かに表現する生徒の育成」につながると考える。また、生徒主体で学び合いのルールを作成することで積極的に安心して学び合いによる学習へ参加できる生徒が増えた。このような学習方法を通して、生徒の学習動機づけを把握するとともに『内的調整』や『同一化的調整』を学習動機づけとする生徒を増やしていくことで学力差も縮まるのではないかと考える。

3. 取組の成果の普及

- ・ICTを活用した授業（動画資料、パワーポイント、みらいスクールステーションなど）を積極的に導入し、学習に対する生徒の興味や関心を高めるとともに、生徒一人ひとりの学習状況を把握し、日頃の指導に生かすことができた。
- ・1人年3回の授業研究を行い、参観、事後研究会を実施し、指導の改善・工夫に努めた。
- ・学力検査やテスト分析を通して、生徒一人ひとりの学習の状況を捉え、授業の改善に努めた。
- ・Q-U結果の分析を行い、生徒指導機能を生かした学習指導に当たった。
- ・ホームページなどに取り組みが分かるように記載した。

○ 今後の課題

今年度実施した各種アンケートにおいて、日々の学習で目標を立てたり、ふり返って内省したりすることが十分にできていなかった。そのため、生徒のふり返りでは正しく自己評価できていないという課題がある。

また、学習動機をさらに同一化的調整へ変えていくためにも「自己実現」（＝なりたい自分像を持ち、それを実現する力）を身に付けさせたいと考える。生徒には、授業や行事などあらゆる場面で、GDCA サイクルを繰り返し行い、中学校卒業時に「G-PDCA サイクルを獲得し、その先の社会でも自己実現を追求できる生徒」を育成したい。

予測不可能な社会になりつつある今、学校に与えられた使命とは「他者に貢献しようとし、自身も幸せに生きることができる大人へと導くこと」であると考えている。知識・理解だけの学力ではなく、本校で育成したい資質・能力を兼ね備えた学力の向上を目指していきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	福島県	番号	07
-------	-----	----	----

協力校名	福島県 私立 郡山ザベリオ学園中学校
------	--------------------

1. 当初の課題

子ども達を取り巻く環境は予測できない変化をしている。VUCA時代と言われる社会を生きていく子ども達には自ら課題を見つけ、主知的に解決の方策を考え、他と協力して解決に向けて努力をする「主体的・対話的で深い学び」の実現が必要である。本校では、このような学びの力をもった生徒を育成するため、昨年度から引き続き「コミュニケーションを通して、自分の思いや考えを豊かに表現する生徒の育成」という主題のもと生徒の学力や学習への意識に関する現状と課題を明らかにし、解決の方法を模索したい。

1-1 学力差における現状

昨年度は、習熟度別クラスを増やしたり、TT 授業を実施したりするなど学び方の種類を増やし、下位層の底上げを図った。全国学力・学習状況調査における数学の結果（図1、図2）より、多少の変動はあるが、今年度も学力差に課題がある。少人数クラスの分け方を再考し、一人ひとりに合った学びが展開できるような授業を展開したい。

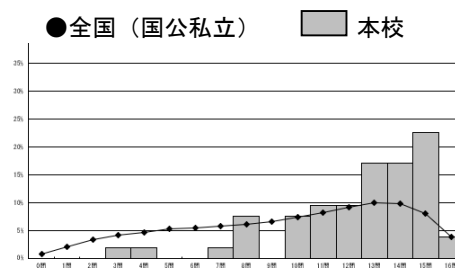


図1 令和元年度

1-2 学習動機づけと学力における現状

西村他（2011）¹は、学習動機づけには『内的調整（例：学習が楽しいから）』『同一化的調整（例：将来や自分のためになるから）』『取り入れ的調整（例：友だちに負けたくないから）』『外的調整（例：やりなさいと言われ、怒られるから）』があり、自律性が高く教育的にも望ましいとされている内的調整よりも、同一化的調整の方が学力向上につながるのではないかと示している。昨年度の本校実施のアンケート（図3）より、学年が上がるにつれ、好奇心や有用性といった内的調整や同一化的調整で学習する生徒が減っている。

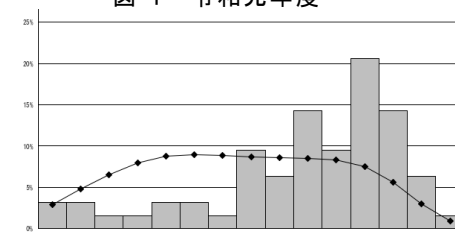
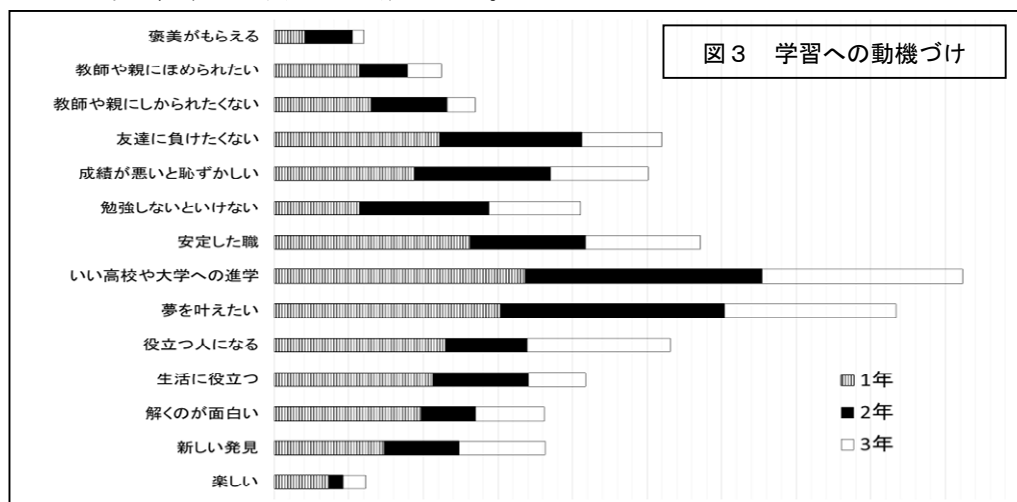


図2 平成30年度

また、義務や他者からどう見られるかといった取り入れ的調整や外的調整で学習する生徒の割合が全学年を通して大きい。このような現状を踏まえ、前者の動機づけを促すために学校ができることを考え、学力の向上を目指したい。



1-3 学び合いによる学習における現状
 すべての学年で「学び合いの学習」を導入している。

昨年度の学び合いに関するアンケート結果より、右の課題があがった。学び合いによる学習の意味や目指す姿の提示をしなかったために、苦手な子は取り残されたり、相手に聞けなかったり、教える側も諦めてしまったりしていただのではないかと考える。生徒自身が学び合いのルールを考え、実践できるような工夫が必要である。

- ・相手の意見を無視して発言した。
- ・関係のない話をしてしまう。
- ・自分のペースで学習が進められない。
- ・何も言わない、言えない人がいて話し合いにならないときもある。
- ・自分の考えをうまく説明できない。

2. 協力校としての取組状況

2-1 全教員で創る研究

(1) 研究全体会

- ・ワークショップ型の研修会を行った。
- ・外部研修の報告会を行い、得た知識の共有を行った。
- ・外部講師による講演会を開催した。

(2) ルーブリックの作成

本校で育成したい資質・能力を全教員で意識し、教育活動を行っていけるよう作成した。また、生徒にもルーブリック表を配布し、行事等で意識付けを行った。

(3) 授業研究、事後検討会

全員が1年間で3回授業研究を行い、他教科の教員でグループを構成し、参観した。事後研究会は、授業者が参加者へ呼びかけ空いている時間を活用し、参観シートにそって意見を出し合い短時間で終われるよう努めた。また、指導案はルーブリック表を活用し、教師自身がふり返るとともに年間を通して資質・能力を育成していくことができるよう作成した。

(4) 生徒の実態把握アンケート

生徒のルーブリック活用や学び合いによる学習、学習動機づけに対するアンケートを実施し、現状を把握した。また、定期テスト後に学習アンケートを実施し、生徒自身のふり返りを行った。

2-2 学力差、学習動機づけに関する取り組み

(1) 個に応じた指導

数学科 第1学年：一斉や少人数クラス
 第2学年：1、2学期は一斉や少人数クラス
 3学期はコース選択
 第3学年：コース選択

英語科 関東圏採用の発展的教科書での授業
 全学年：習熟度別で4クラス（内All Englishクラスが1つ）

(2) 学び合い（アクティブ・ラーニング）学習の実践

- ・タブレットなどのICTを活用した授業（写真1）
- ・ディスカッションを取り入れた授業（写真2）
- ・「みんなのルール」（学び合いによる学習で気を付けたいこと）の作成（写真3）

(3) 異学年学習

第2、3学年合同による学習合宿における縦割り班での学習（写真4）

(4) 全国学力・学習状況調査の分析

特に、生徒質問紙調査と正答数を分析した。また、学力と学習意欲の関係を明らかにした。



写真1 理科：タブレットを用いて



写真2 数学：ディスカッション

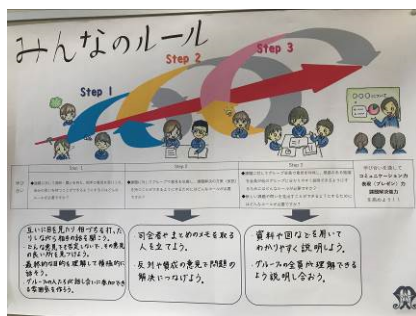


写真3 みんなのルール



写真4 異学年での学び合いの様子

3. 取組の成果の把握・検証

3-1 全教員で創る研究について

3-1-1 教員へのアンケート結果より

(1) 授業研究や行事におけるルーブリックの活用

成果	課題
教員が授業で目指す生徒像を意識できた。	教科ルーブリックの作成が必要。
授業や行事で目標を設定を生徒が意識できた。	ルーブリックを見る機会をさらに増やす。
生徒のふり返りの指針となった。	ルーブリックの項目と段階の精査。
	行事などの前後でどのように生かすかを考えていく。 (年度当初に説明会を行うなど)
	生徒が継続した自己分析を行えるよう、ふり返りに対して教員のフィードバックが必要。

教育活動の中で、生徒が「できたこと」「できなかったこと(どうしたらできるか)」をふり返る時間とふり返りに対する他者からのフィードバックが重要であると考えられる。

(2) 学力差、参加意欲と学び合いによる学習の関係

成果	課題
課題や問題の良さが、学び合いによる学習での参加意欲を高めた。	飽きないような場の設定、場のコントロールや発問のタイミング、課題を磨く必要がある。
数人で取り組むため、分からない生徒も安心して抵抗なく聞くことができる。	学び合いによる学習が上手く機能していない班へのフォローができていない。
ヒントのやり取りや知識・技能不足を補い合うことができる。	学び合いの定義を再確認し、活動の一貫性を失わないようにする必要がある。

「質の高い課題」「タイミングの良い発問やヒント」「その場の雰囲気」を教員が提供することで、学びが深まるとともに学習への意欲がわくと考えられる。

(3) 学力差、参加意欲と少人数クラスの関係

成果	課題
10人以下のクラスで、意欲の向上を感じた。	習熟度別の場合、全学年で学習意欲が低い。
習熟度別であると、どのような方法、資料でどこまで深めるかを変えられるため、個に合った学習をさせることができた。	数学でのコース選択は、人数の偏りができてしまうため、生徒に合ったクラスをアドバイスしていく必要がある。
数学でのコース選択は、目的を理解して選択した生徒にとって意欲の向上につながった。	18人のクラスで8~10人程度の座席配置を2つにしたが、上手いかなかった。
生徒の表情や発話を読み取れるため、必要な声かけがしやすく、学力向上につながった。	
クラスを半分にするすることで、生徒同士や教員と生徒間でのコミュニケーションが増えた。	

最低限の人数での授業や生徒自身でコース選択する授業において学力差、参加意欲の向上が見られた。一方で、コースを分けることで教員数が足りないという課題もある。今あるもので可能なものを見つけていかなければならない。

(4) その他

成果	課題
講義型ではなく、ワークショップ型研修でチームとしての意識向上が図れた。	公開の授業研究会があれば、教員のスキルアップにつながるのではないか。
事後報告を通して、参加していない研修の内容を知ることができた。	今後もルーブリックの活用を続け、生徒の記録として溜めていく。
	授業研究の回数や時期、位置づけを改めて考える必要がある。

教員自身が授業や行事の内容や計画をふり返り、次に生かしていかななくてはならない。生徒のために何ができるか考え、学び続ける姿勢を持ち続けることが必要である。

3-1-2 ルーブリックの作成と活用

全教員で育成したい資質・能力について項目や定義、目標を考え、行事等のふり返りに活用した。ルーブリック表(表1)を作成することで、行事の目的を生徒に分かりやすく伝えることができ、内容も一貫したものとなった。また、生徒一人ひとりが目標をもって取り組むことで、参加意欲につながったと考える。

郡山ザベリオ学園中学校 学校ルーブリック一覧

実施年度	項目	1	2	3	4
3学年 外部模試	英語	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。
	数学	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。
3学年 外部模試	英語	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。	色んな単語・構文を聞き、その意味を推測する能力がある。
	数学	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。	問題文を正確に読み取り、問題の条件を整理して解くことができる。

表1 学校ルーブリック表

3-2 学力差、学習動機づけについて

3-2-1 外部テストの点数分布より

以下の結果(図4~図7)より、1週間の授業時数が多く、習熟度別クラスを実施している英語や少人数クラスで実施している数学において右に移動していることが分かる。しかし、社会では右への移動が小さい。このことから、少人数で学び合うことは、苦手な生徒を引き上げることに有効なのではないか。しかし一方で、上記の取り組みだけでは学力差自体を大きく縮めることが難しいことも分かった。

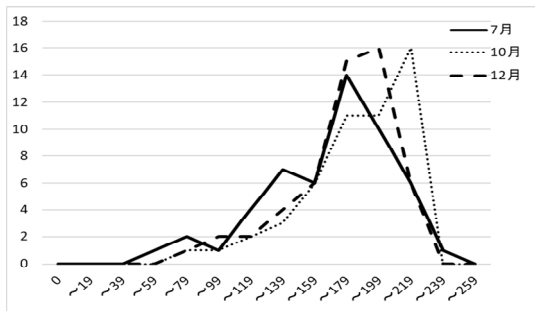


図5 3学年外部模試の合計点分布

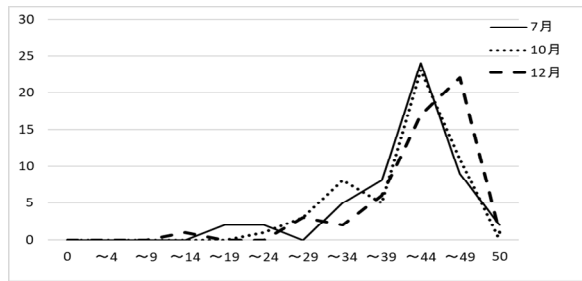


図4 3学年外部模試：英語点数の分布

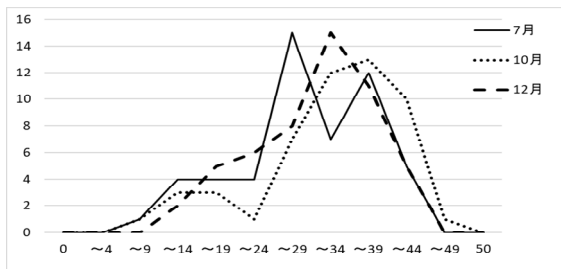


図6 3学年外部模試：数学点数の分布



図7 3学年外部模試：社会点数の分布

3-2-2 学び合いによる学習に関するアンケート結果より

1-3 学び合いによる学習における現状で示した通り、学び合いによる学習では「学ぶ意欲」と「自己表現」が重要である。本校の生徒の実態として図8より、Step2以上まで達成している生徒が8割ほどになっている。生徒主体で目標を達成するためのルールを作成したことや授業中の教員の声かけによってこのような結果になったと考える。(学び合いによる学習に関するアンケートの詳細は別冊資料に記載する。)

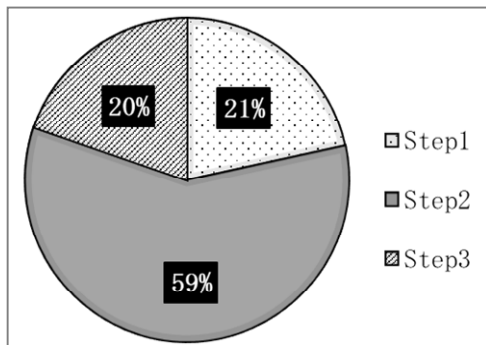


図8 「みんなのルール」における達成度

- Step1 課題に対して興味・関心を持ち、相手の意見を受け入れ、自分の思いを持つことができる。
- Step2 課題に対してグループで意見を交換し、課題解決の方策(仮説)を持つことができる。
- Step3 課題に対してグループ全員で意見を吟味し、根拠のある結論を全員が他のグループに分かりやすく説明できる。新しい課題や問いを見い出すことができる。

また、生徒には達成できた段階のふり返しを行い、下記のようなふり返りがあがった。ルールや目標をステップごとに生徒主体で決めることでより具体的なふり返しをすることができた。

- ・ 反対の意見を取り入れることができたが、みんなが理解できてはいない。次は分かりやすく討論したい。
- ・ 積極的に話し合いに参加できた。分からないところを正直に聞くことができた。
- ・ 周りの人の意見を聞き、生かすことができた。たくさんの人とコミュニケーションを取りたい。

3-2-3 学習動機づけに関する調査結果より

(1) 学習動機づけに関するアンケート結果より

図9より、本校生徒の実態として全体的に同一化的調整を学習動機づけとしている生徒が多い。しかし、中学1、2年生においては外的調整を動機づけとしている生徒が中学3年生と比較すると多い。外的調整では「18」「19」「16」、取り入的調節では「10」「11」「14」の項目に集中していることが分かった。なぜ学習するのかを改めて生徒と考えていかななくてはならない。

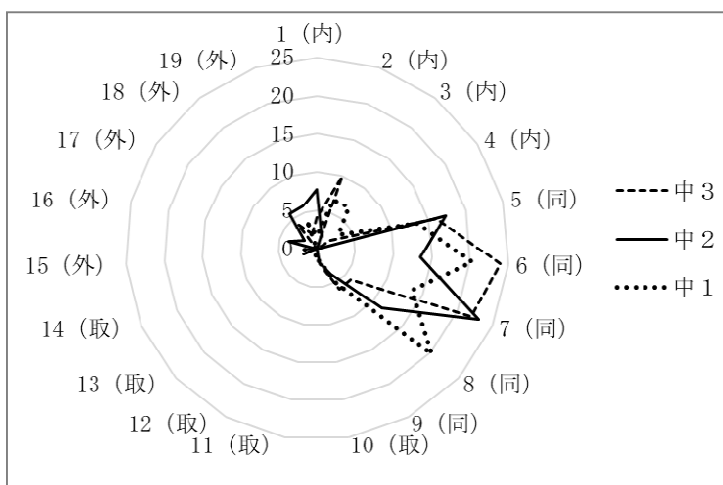


図9 学習動機づけ (%)

(内) 内的調整 (同) 同一化的調整
(取) 取り入的調節 (外) 外的調整

- 1 問題を解くことが面白いから
- 2 難しい問題に挑戦するのが楽しいから
- 3 新しい解き方ややり方を見つけるのが面白いから
- 4 自分が勉強したいから
- 5 将来の成功につながるから
- 6 夢を実現したいから
- 7 希望する高校や大学に進みたいから
- 8 自分のためになるから
- 9 勉強するのは大切だから
- 10 勉強で友だちに負けたくないから
- 11 友だちより良い成績を取りたいから
- 12 周りの人に頭がいいと思われたいから
- 13 友だちにバカにされたくないから
- 14 勉強できないと恥ずかしいから
- 15 やらないと周りの人がうるさいから
- 16 周りの人からやりなさいと言われるから
- 17 成績が下がると怒られるから
- 18 勉強することは、規則のようなものだから
- 19 みんな当たり前のように勉強しているから

(2) 全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査と正答数の分析結果より

下記の図10～図14より「1」の項目に正答数が多い生徒が集中している。

このことから、意欲と学力には関係性があるという示唆を得た。今後も、生徒の学習動機づけを教員も把握し、学習への意欲の向上を目指していくことが必要である。

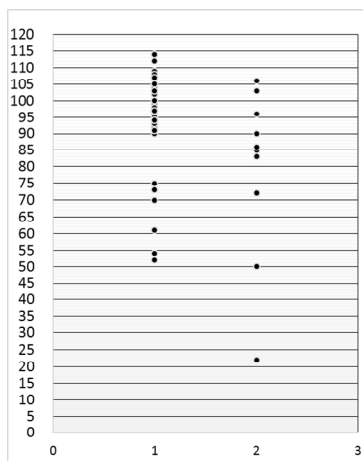


図10 正答数と意欲の関係

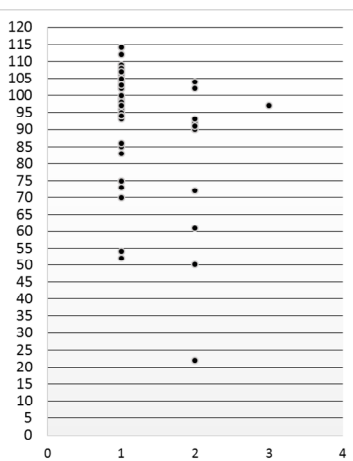


図11 正答数と意欲の関係

理科：文章など書く問題に最後まで書こうと努力したか？ (図10)

数学：言葉や数、式を用いて説明する問題に最後まで書こうと努力したか？ (図11)

- 1：全ての書く問題まで解答を書こうと努力した
- 2：書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中で諦めたりしたものがあった
- 3：書く問題は全く回答しなかった

生徒間で話し合う活動を通じて、
自分なりの考えを深め、広げること
ができていますか？

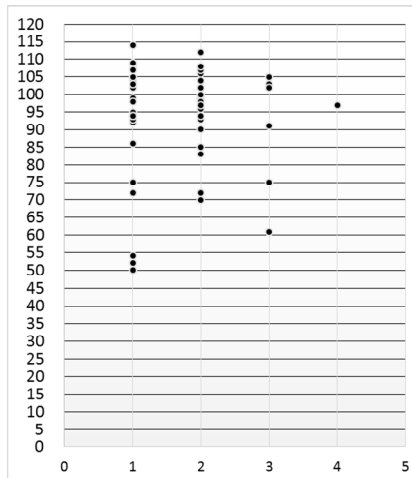


図 1 2 正答数と学び合いの関係

課題の解決に向けて、自分で考え、
自分から取り組んだか？

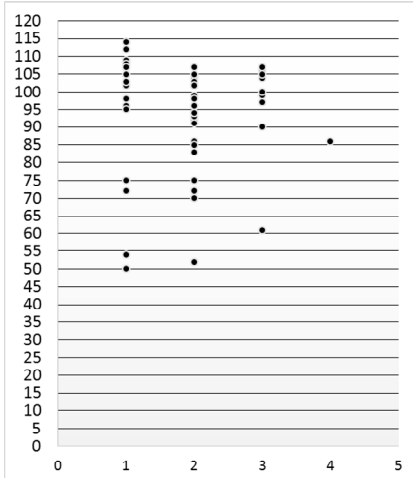


図 1 3 正答数と学び合いの関係

自分の考えが上手く伝わるよう、
資料や文章、話の組み立てなどを
工夫して発表したか？

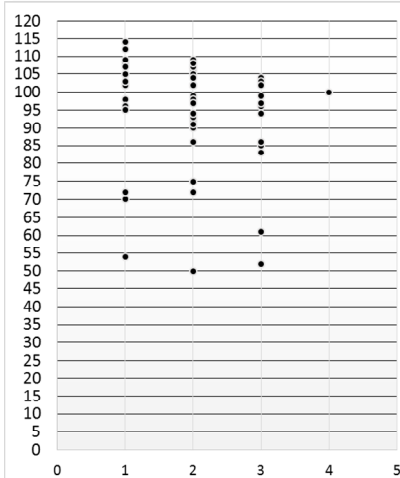


図 1 4 正答数と学び合いの関係

1 : できた 2 : どちらかといえばできた 3 : どちらかといえばできていない 4 : できていない

4. 今後の課題

2年間『学力差』に関わって研究を行ってきた。当初の課題にもあるように、学力と学習動機づけには相関関係があると本研究で再確認した。西村他（2011）は、同一化的調整が学力向上につながるのではないかと言っている。また、それだけではなく現在の学習状況を分析し、これからの学習の進め方を自分なりに調整する力、いわゆるメタ認知能力の育成も必要だと示している。

今年度実施した各種アンケートにおいて、ふり返しを行うにとどまってしまう、生徒一人ひとりへのフィードバックを行えていない。また、日々の学習で目標を立てたり、ふり返って内省したりすることも十分にできていない。学習動機を同一化的調整へ変えていくためにも「自己実現」（＝なりたい自分像を持ち、それを実現する力）を身に付けさせたいと考えた。生徒には、授業や行事などあらゆる場面で、G：目標やゴール（目標設定）→P：計画（意識・行動などの決定）→D：行動（計画に基づく実践）→C：評価（過程と成果のふり返し）→A：改善（次に向けた見直し）のサイクルを経験させたい。また、その繰り返しの通して、中学校卒業時に「G-PCDAサイクルを獲得し、その先の社会でも自己実現を追求できる生徒」を育成したい。

そのために来年度は、紙媒体よりも多様な記録の収集・蓄積が可能であり、教員・保護者・生徒間など幅広くフィードバックを受けることが可能になるタブレット端末でclassiを活用し以下の実践に取り組んでいきたい。

- ①校内外行事の記録やふり返し、アンケートをclassiで行い、eポートフォリオの作成を行う。
- ②三者面談では、①を用いて資料を作成し、プレゼン型面談を実施する。
- ③教科ルーブリックの検討を行う。

予測不可能な社会になりつつある今、学校に与えられた使命とは「他者に貢献しようとし、自身も幸せに生きることができる大人へと導くこと」であると考えます。知識・理解だけの学力ではなく、本校で育成したい資質・能力を兼ね備えた学力の向上を目指していきたい。

参考文献

- 1 西村 多久磨, 河村 茂雄, 櫻井 茂男 (2011). 自律的な学習動機づけとメタ認知的方法が学業成績を予測するプロセス内発的な動機づけは学業成績を予測することができるのか? -教育心理学研究, 59, 77-87.